立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院生研究
２０１０年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	英米文学専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	文学研究科・英米文学専攻・２年	大西　寿明　印	
指導教員	所属･職名	氏　名	
	文学研究科・教授	新妻　昭彦　印	
自然・人文・社会の別	自然　・　[人文]　・　社会	**個人・共同の別**	[個人]　・　共同　名
研究課題名	第一次世界大戦以後のイギリス文学の考察：D. H. Lawrence を中心に		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	立教大学文学研究科英米文学専攻・博士課程後期課程２年	大西　寿明	
研究期間	２０１０　年度		
研究経費	２００　千円		

研究の概要（200～300 字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

1920 年代のモダニズムとその後の 30 年代を戦間期として位置づけなおすことで 20 世紀イギリスにおけるナショナリズムなどの問題をより流動的で、かつ幅広い視点から検討することが可能となる。その中で本研究は、イギリスのモダニストの代表者である作家 D. H. Lawrence を取り上げ、また 20 年代に作家となり、50 年代まで小説を書き続けた Evelyn Waugh をモダニスト以降の作家として比較検討し、二人の作家を戦間期の作家として再考察する。まず挙げられる二人の作品の共通点に第一次世界大戦の影響があり、またその問題から派生して大戦下の塹壕から始まる人間性への不安がある。この問題に関して両者が取り組んでいることは共通するが、しかしその扱いには二人の年代差同様、違いがみられる。その差異に焦点を当て、戦間期に芽生える人間性の不安という心性の変遷過程を追い、現代文学にまで波及する戦争と人間性の問題を考える土台とする。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　Evelyn Waugh　〕〔　D. H. Lawrence　〕〔　戦間期文学　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

２０１０年度の研究は２００９年度より行っていた戦間期におけるイギリス小説研究を引き続き行うことが主眼であったが、研究発表、論文執筆の点から振り返ると一定の成果があったと言える。今年から研究対象としたD. H. Lawrence、とりわけ彼の最晩年の作品である*Lady Chatterley's Lover*について、まず７月３日に行われた英米文学研究方法論で「戦間期文学としての *Lady Chatterley's Lover*の位置—Clifford 再考を中心に—」というタイトルで研究発表を行った。Sarah Cole は、第一次世界大戦からの帰還兵､特に戦場で身体を傷めたものに着目し､彼らの身体に刻印された傷が、「頽廃」(“brokenness”)という感覚、概念として、精神的、心理学的、あるいは文化的に人間の身体そのものと、想像上の人間性の構築に影響を与えたことを指摘している。コールの分析は Sigmund Freud の人間身体の儚さと限界という戦後における人間性への不安を実証的に裏付けているし、また世紀末より Max Nordau を軸として展開された「退化論」の延長線上にもあるだろう。この「頽廃」の感覚を身にまとった帰還兵の一人として、本発表では従来その人物造型の劣悪さばかりが批評されてきた貴族 Clifford を再評価し、彼の存在こそが第一次世界大戦と、そしてその後の時代を検討する上でロレンスにとって描かれなければならなかったものであることを論証した。それはロレンス自身が「『チャタレイ夫人の恋人』について」で述べているクリフォードを不具にしなければならなかった必然性を検討するものである。従来、*Lady Chatterley's Lover*は、近代資本主義によって引き起こされた人間性の喪失に反逆して、原始的生命への復帰を描いた作品とされてきた。その文脈の中で、クリフォードは非人間性の象徴として、あるいはメラーズとの比較において、非人間性や退化の象徴として従来捉えられてきたことによって、大戦より傷を負い帰還したクリフォードの身体そのものと、戦後の彼の作家としての活動は、典型として扱われることで、十分には論じられてこなかった。しかし、戦後に瀰漫した「頽廃」という感覚への不安に目を向けるならば、あるいは晩年のロレンスとの親近性を考えるならば、クリフォードの身体と作家として戦後世界を描いた彼の態度こそが、この小説を戦後に書かれるべくして書かれた作品とするはずである。この研究発表では、*Lady Chatterley's Lover*における負傷したクリフォードの身体を分析する際に、補助線としてまず短篇“England, My England”を取り上げながら、第一次世界大戦における美しい男性身体の喪失を分析することで、ロレンスの作品に通底する戦後の悲劇の特質を検討した。英米文学研究方法論において発表された上記の研究は、2011 年度『英米文学』に、大幅に加筆、修正され、「傷んだ身体への眼差し—*Lady Chatterley's Lover*の位置」というタイトルで掲載された。

ロレンス研究においてはまた、１２月１８日に開催された２０１０年度立教大学英米文学会において、同じく *Lady Chatterley's Lover*における優生学と未来派の表象に着目し、上記の研究発表とは別の観点から研究発表を行った。「『チャタレイ夫人の恋人』におけるメラーズのアンビヴァレントな身体」というタイトルで行った研究発表は、*Lady Chatterley's Lover*を、メラーズ／コニーの性愛関係に焦点を当てる先行研究とは異なり、これまで論述されることのなかった未来派との影響関係から考察したものである。未来派との関わりを分析する上で重要なことは、作中における森番メラーズの未来派批判が、戦後の優生学の文脈に則って行なわれていることを検証することである。未来派を批判することを通して、男女の性愛関係における健全性こそを腐敗した世界における救いであるとメラーズは主張するが、しかし、問題は遺伝的優性を追い求める優生学がメラーズの傷ついた身体さえも切り離すべき対象としてしまう。この矛盾うぃ出発点として、この研究発表では、*Lady Chatterley's Lover* 論において、これまで取り上げられてはこなかったロレンスの未来派批判を通して、本作品におけるロレンスと優生学との関係を明らかにし、自身をも優生学的見地から批判的対象としてしまうメラーズの不完全でアンビヴァレントな身体を考察した。上記二つのロレンス研究は、いずれもロレンスを通して第一次世界大戦と戦後の世界を経験した作家が、いかに作品内で時代を表象するかに焦点が当てられている。ロレンス以降、彼に影響を受けなかった作家はいないとまで言われる大作家を多角的な観点から研究できたことは、今後の戦間期文学研究、あるいは他の作家の研究を行う上で非常に有意義であった。

研究成果の概要　つづき

本年度はロレンス研究だけではなく、同時並行で博士課程前期課程より継続している Evelyn Waugh 研究も行った。具体的な成果としては１１月６日に慶應義塾大学三田キャンパスで開催された日本英文学会関東支部大会研究発表会においてウォーの第一作目の小説である *Decline and Fall* を取り上げて、「戦間期文学としての *Decline and Fall* の位置―ヴォーティシズムの影響を中心に」というタイトルで研究発表を行ったことである。90 年代において、ウォーの初期小説は前衛芸術、モダニズム、映画などとの影響関係が着目され、歴史的コンテクストからの読み直しがなされてきている。1930 年に出版された第二作 *Vile Bodies* においては、Brooke Allen や Archie Loss らが指摘するように、自動車レースにおいて、観衆がレースに対して過剰に速度を求め、その結果、「陽気な若者たち」の一人が大事故に遭い、のちに死亡するという形で未来派へのパロディが行われている。つまり、*Vile Bodie*s において機械と速度、また暴力を空疎化して描くウォーの姿勢は、未来派の思想に懐疑的でありながら、少なくとも初期作品において、これらの芸術運動や文化的背景が、戦間期の世界を描く上で重要な要素であることを如実に物語っている。パロディが関心の一つの形態であるならば、ウォーは戦間期の世界を把握する上で、これらの前衛芸術の社会的影響力を認識していたと言える。しかし、このような前衛芸術との関係は、すでに第一作目である *Decline and Fall* に顕著に表れているにもかかわらず、これまで深く掘り下げられることはなかった。20 年代後半に出版された *Decline and Fall* は、映画技法、モンタージュ、あるいは前衛芸術との影響関係を鑑みるとき、たしかに形式的にモダニズムとしての特性を踏まえている。しかし、このモダニスティックな技法を用いて描く世界観は、強烈に諷刺される世界観であることも、また同時に意識されねばならない。モダニストにとって現代社会に対する幻滅こそが創造の出発点であるならば、モダニズム的手法を諷刺の対象として用いるウォーにとって、幻滅を描くモダニズムへの懐疑こそが創造の出発点となったと言えるからである。ゆえにこの研究発表では、まずテクストに内在する前衛芸術、とくにヴォーティシズムの影響を補助線として、ウォーによって、いかに人間の非人間性というモダニズムのテーマが作品内に取り込まれているかを確認した。しかし、この執拗に追及される人間の非人間性というモダニズムの主題は、逆説的に *Decline and Fall* のエピローグにおいて、人間にとって最も情動的な記憶への作家の執着を喚起させることになる。そうして人間性の不在を強烈に描いた本作品において、ウォーの人間の情動性への回帰願望を確認することで、この作品をモダニズムとの連続性から戦間期文学として位置付けなおした。

上記の研究の他に E. M. Forster の *A Passage to India* についても論文執筆を行った。これは、２０１１年３月１９日に開かれるはずだった日本キプリング協会にて発表予定だったものであるが、３月１１日の震災によって学会自体が中止となり、発表を行う機会がなくなった。この論文では作家のホモセクシャリティと彼が称賛したヒンドゥー教との関係を分析している。

※　この（様式２）に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（Ａ４縦型横書き１枚・自由様式）を添付すること。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

①
大西寿明、「傷んだ身体への眼差し―『チャタレイ夫人の恋人』の位置」、『英米文学』、第71号、2010、63－79。

②、③
なし。

④
日本英文学会関東支部大会研究発表会、2010年11月6日、於慶應義塾大学三田キャンパス　「戦間期文学としての *Decline and Fall* の位置―ヴォーティシズムの影響を中心に」

立教大学英米文学会、2010年、12月18日、於立教大学池袋キャンパス　「『チャタレイ夫人の恋人』におけるメラーズのアンビヴァレントな身体」

第二回英米文学研究方法論、2010年7月3日、於立教大学池袋キャンパス　「戦間期文学としての *Lady Chatterley's Lover* の位置―Clifford 再考を中心に―」